

俳句の題材（Ⅲ）

山口青邨

季題のうちにも作りにくいものもあれば、作り易いものもある。又、好きなものもあるし、嫌いなものもある。時代遅れのものもあるし、新鮮なものもある。これはまた人それぞれによって違ふことである。むかしおたまじゃくしばかり見て、それを一生懸命作った人もあるし、沼貝ばかり作ってゐた人もある。又、海の句ばかり詠んだり、山の句ばかり詠む人もある。それにはやはり一つの努力、研究があるわけで、人の氣づかない新発見などあつて面白い。

四五年前に私は、

棚の上に芭蕉の像や三尺寝 青邨

といふ句を作った、三尺寝といふのは職人などが狭い仕事場とか、仕事部屋で、いろんな材料や道具のある中で、足もろくに伸ばせないところで晝寝をすることである。この季題はこの頃はとんとモダンさを失つて、誰もこんなものを詠みもしない、そこで私は一つこれに活を入れてやらうと思つて——といふよりも、ある時、私は書齋の中のまたその中の狭い都屋で、机や書物やタイプライターや紙屑籠やいろんなもののある中で晝寝をしたことがあつて、その時、三尺寝といふことがふと頭に浮んだ。よし、この言葉を少し擴張してやらう、職人部屋から書齋にもつて来ようと思ひついた。然し三尺寝といふ内容は、古くから大工、左官、職人——さういふ人達のものとなつてしまつてゐるので、これを書齋のものにするには何とか工夫しなければならぬ、そこで「棚の上に芭蕉の像や」とおいた、これなら、たとへ職人としたところで、よほど高級な職人といふことにならうし、又一方へボ學者としても職人とは違つたところがあらう、さう思つて私は満足した。實際私の書齋の壁面の書棚にはささやかながら芭蕉の像が飾つてある、決して作り事ではない。この句の外に次のやうな句も作つた。

釣魚大全枕にしたり三尺寝 青邨

そそり立つ書物の壁や三尺寝 同

こんなことをすれば古い「三尺寝」もまた生きてくる。その後、ぽつぽつ三尺寝を作る人が出て来た、黒澤明史がまづこれをやつて成功した。

棟梁の娘に横戀慕三尺寝 明史

然しこれはむかしの型の三尺寝だ、それにも拘らず、古風だが何か近代的戀愛の香がしないでもない。

古い死んだやうな季題でも、それを活かして使へば使へるものだといふことを私は言ひたい、あんなものは古い——と捨て去ることは出来ない。少くとも文學に於ては古い新しいといふことはそれを息を吹きかへさす人の力にあることを忘れてはならない。

新しい季題といふものも少しづつふえてゆく、古い季題も少しづつ減つてゆく、これは當然のことである、その位の整理は必要である。

季題はそのままではコンベンショナルなものである。それだけではまだ生命が吹きこまれてゐない形骸である、人がそれに魂を吹きこむのである。